

国際理解教育部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

「21世紀に生きる子どもたちを育てる国際理解教育の在り方はどうあればよいか」
～教育課程のなかで、「多文化社会における共生」「グローバル化にともなう結びつきについての理解」などの国際理解教育の領域をどのように位置づけ、教材を開発し、実践するか～



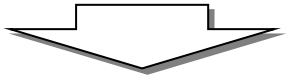
2. 研究内容

(1) 国際理解教育の教育課程での位置付け

- 「いつでもどこでもできる」国際理解教育の工夫
- 他教科や総合的な学習との連携

(2) 既存教材や外部講師の活用及びオリジナル教材の開発

- 参加型学習
- ワークショップ・アクティビティ
- ゲストティーチャー



3. 研究の方法

(1) 交流計画

今年度は、10月以降に JICA から講師を招き、希望者を募ったワークショップ（実技・理論研修会）の開催とする。また、事後の反省は紙面を通して交流する形としたい。

(2) 運営体制

部会役員を中心に、駐車場等は部員の協力を得ながら運営を行う。密集、密接など感染症対策を十分行った上で運営していく。

(3) レポートの扱い、部数、形式

実践レポートの提出は、今年度行わない。本来はレポート交流を行う予定であったが、次年度へ持ち越しとしたい。

II. 研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

5月8日（金） 石教研課題部会役員研修会
第1回 部会役員研修会
研究協議会時の会場、内容、担当者等の検討

10月8日（木） 実技研究会（JICA 北海道）

(2) 部会研究協議会での研究成果

今年度は2カ年計画の2年次目にあたり、当初は授業やワークショップを計画していたが、コロナ禍において計画通り実施することが困難となった。そこで、JICA 北海道において10月8日(木)に谷本亜紀氏(平成27年度、第2次青年海外協力隊参加)をお招きし、ワークショップを実施することとなった。このような状況の中で、JICA 北海道と連携を図りながら開催することができたことは、大変有意義であった。

2. 部会研究協議会での交流

(1) ワークショップ交流内容(100リットルの水)

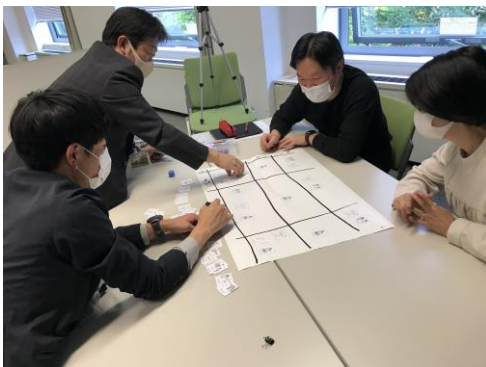
谷本 亜紀 氏(青年海外協力協会)

谷本さんには、昨年度も課題部会で派遣されたウガンダの様子を報告していただいた。開発途上国では、下痢が原因で死亡する割合が非常に高く、菌が体内に入るプロセスや菌への感染を防いでいくことが大切になる。そこで、排泄物を発生源とする菌が入らないようにするために、現地ではトイレや手洗い指導に力をいれていたと話されていた。お話を通して「できることから改善していく」ことの大切さを教えていただいた。今年度、紹介していただいたワークショップは、協力隊での経験を通して作成したオリジナル教材である。以下、その教材を紹介していく。



①アクティビティ1 100リットル以内(3日間)で生活しよう!

はじめに、「100リットル以内で3日間生活するためには、どうしたらよいか」を考えた。1回のお風呂で20リットル、洗濯で20リットル、調理で10リットル、トイレで8リットル・・・などと考えていくと、あっという間に100リットルを超えてしまう。そこで私たちは、1日で300リットル以上の水を使っている(国土交通省水資源部より)ことや、一方で国連が定めた「必要な1日の水の量」の20リットルをも確保できない国があることを知った。



このアクティビティでは、「お風呂の水を洗濯やトイレに使おう。」「食事は朝に作って作りおきをしよう。」などといった節水の工夫を考えるグループが多かった。谷本さんは、「日本人は少ない水でもお風呂やシャワーに入ろうとする。」など、衛生面を重視する傾向があると話されていた。

②アクティビティ2 フォトランゲージ～3枚の写真から～

次に、グループに1枚ずつ3枚の写真が配られた。写真を見て気づいた問題点、原因、解決策をそれぞれのグループで考えた。

写真Aのグループ

問題 : 児童労働

原因 : 労働力不足、貧困、水場が遠いなど

解決策: 安定的な水供給の仕組み、農業や土壌の改良、援助など



写真Bのグループ

問題 : 水が濁っている。

バケツがさびついている。

水を運ばなければならない。

原因 : 浄水が整備されていない。

物資が不足している。

井戸等がない。

解決策: 浄水の技術を指導、支援する。

汚水に対する危機意識をつける。

貯水できる技術をつける。

写真Cのグループ

問題 : 児童労働、女性が水運びをしている。

原因 : 教育格差、ジェンダー問題、上下水道の整備不足。

解決策: 上下水道の整備、技術者の育成、児童労働の子が行けるような学校をつくる。

それぞれの写真から、その地域が抱える問題について考えることができた。

③私たちにできること

日本における水問題は「節水」。最後に自分たちにできる節水について考えた。参加者からは「水の流しっぱなしをやめる。」「水の再利用をする。」「家族への節水の声かけをする。」などのアイデアが出された。

アクティビティを通して

遠いアフリカの地の課題ではあるが、私たちが生きる地球上の出来事であり、「自分事としてとらえてほしい。」という授業者の願いが伝わるワークショップであった。私たちのちょっとした意識の変化と協力で救える命があることや、自分たちの抱える水問題についても学びを深めることができた。

Ⅲ. 研究の成果とまとめ

【成果】

○研究内容（１）に関して

国際理解教育は、教科として位置づけられているわけではないので、総合的な学習の時間や他教科の中で実践していく必要がある。今回のワークショップの内容などを教育課程に上手く位置づけ、活用しながら実践を広げていきたい。また、SDG s と関連させていくことで、教科や内容の幅が広がり、その可能性が広がるものとする。

○研究内容（２）に関して

今年度はレポートの提出がなかったため、先生方の負担を軽減することができた。また、JICA 北海道やD-net などの関係機関と連携し、各校での実践につなげていきたい。

【課題】

○研究内容（１）に関して

レポート交流が無かったことで参加者の負担軽減にはつながったが、一方で、他校の教育課程での位置づけや実践内容の交流はできなかった。次年度以降も参加者の声やニーズを踏まえつつ、教育課程での位置づけや教科との関わりについて学びが深まる内容を準備していきたい。

○研究内容（２）に関して

既存の教材やSDG s をテーマにした新たな教材も作成されているので、幅広く紹介できるように部会員に情報提供をしていきたい。

(文責 宮浦 匡典)